

## 新国立競技場計画に求められる未来への想像力

### 1940年と1964年のオリンピックで問われたことは何か

松隈 洋(建築史家・京都工芸繊維大学教授)

榎文彦氏の問題提起によって、今回の新国立競技場計画の危うさについては広く知られるようになった。ここで急ぎ付け加えておきたいことがある。それは、今焦点となっている明治神宮外苑の歴史的な景観をめぐるのは、幻に終わった1940年と初の開催となった1964年のふたつのオリンピックでも、まったく同じ議論が交わされていたという事実だ。

1936年7月31日、1940年に予定された第12回オリンピック大会の開催都市に東京が選ばれる。その立候補ファイルには、1926年に竣工した神宮外苑競技場を改築して主会場とすることが盛り込まれていた。しかし、招致決定後も、この主会場をめぐる議論が紛糾する。巨大な競技場の建設が神宮外苑の景観を損なうとの異論が出されたのだ。そう強く訴えたのは、文部省から派遣されて第11回ベルリン大会の主要施設を視察し、10月に帰国したばかりの東京帝国大学教授・岸田日出刀である。彼は、神宮外苑を主会場に招致が成功した経緯自体は認めた上で、「敷地面積の狭隘」と「神宮神域の風致を害する」ことから、この場所がふさわしくないと断固主張する。その論旨に説得力があったのも、オリンピック組織委員会の下、岸田は、教え子の前川國男や学生の丹下健三らに、改築案の検討図面を描かせていたからである。さらに、神宮外苑を管轄する内務省の強い反対もあって、主会場の敷地は、1938年4月23日、駒沢ゴルフ場跡地へと変更され、国際オリンピック委員会の了承も取り付ける。こうして、すでに日中戦争下だったものの、岸田の身を賭した主張によって、神宮外苑の歴史的な景観はその土壇場で守られたのである。そこには、伊東忠太や佐野利器、小林政一ら先人たちが守り育ててきた都市公園の景観を何としても守りたいとする岸田の意志があったのだと思う。だが、この戦前のオリンピックは、日中戦争の泥沼化によって、1938年7月15日、開催の返上が閣議決定され、幻に終わってしまう。そして、皮肉にも、そのわずか5年後の太平洋戦争下の1943年10月21日には、出陣学徒壮行会が挙行され、冷たい雨の中を行進した2万5千人の学生たちは、平和の祭典が開催されるはずだった同じ場所から戦地へと向かった。

こうして迎えた戦後、進駐軍の接収を経て日本に返却された神宮外苑競技場は、1958年に予定された第3回アジア競技大会の会場として改築されることになる。この時も、巨大となるコンクリートの観客席の高さをめぐって、激しい議論が起きる。それでも、隣接する神宮球場の外野席の高さを超えないことで決着がつき、建設された観客席の高さは8m以下に抑えられ、絵画館前の広場との間の森も守られて、その穏やかな景観は何とか守られたのである。しかし、続く1964年の第18回オリンピック東京大会のために、急きょ観客席のさらなる増設が求められ、その景観との調和は大きく損なわれてしまうことになる。この戦後に実施された2度の改築は、当事者たちの大きな精神的負担となったに違いない。その証拠に、国立競技場の設計責任者を務めた角田栄(建設省関東地建営繕課長)は、後の1969年にまとめられた『国立競技場10年史』に、次のように記したのである。

「この増築によって、スタンドの一番高い部分では地上23m40cmにもなり、周囲の樹木も大量に伐採または移植することになりました。(中略)オリンピックという至上命令のため己むをえないことでした。」

たしかに、角田は、続く文章に、この増築によって外苑周辺が著しく整備されて立派になり、オリンピックが成功裡に終わったと記している。それでも、こう正直に記さずにはいらなかったのだ。

私たちは、戦前戦後の激動の時代を目撃してきた現在の国立競技場の歴史的な文脈と守られてきた景観を共有しているのだろうか。そこに、2011年3月11日以降の日本の現実と抱えている難題、すなわち、少子高齢化と生産年齢人口の急激な減少、高度経済成長期に大量につくられた公共インフラの劣化に対する膨大な修繕費の見通し、を重ねるとき、目指すべき道筋は明らかとなる。そして、何より残念なのは、戦争から平和の時代を迎えた喜びを共有できた1964年のオリンピックとは異なり、2020年の大会に向けて議論されることの多くが、経済効果という指標に集中している点だ。そこに欠落しているのは、未来への想像力である。神宮外苑を築こうと尽力した100年前の人々は、けっして経済効果も、自分たちの利益も求めてはいなかった。関東大震災と太平洋戦争を乗り越え、市民が親しめる憩いの都市公園を遠い将来に実現させることを願ったに違いない。今求められるのは、100年の蓄積をもつ都市の景観を引き継ぎ、これ以上の環境負荷を与えずに、より市民に開かれた場所として、100年後の子供たちに引き継いでいくことなのだと思う。